かわしま

６月号
令和４年　５月３１日（火）
横浜市立川島小学校

君ならどうする？

校長　　石塚　直実

初夏です。ハルシャギクの金色の花の横をツバメがかすめていきました。金色の花が風に揺れました。煌めく太陽の光を浴びて、この２か月の間、子どもたちの笑顔とやる気と目の輝きに目を細めてきた私です。

この学校だよりがお手元に届く日は、本校の「ゆめっ子運動会」が予定通りに行われた直後です。いかがでしたか？本番直後なので、この６月号では運動会の様子について書くことができません。それでも、全体練習時に６年生が１年生の椅子を嫌な顔ひとつせずに校庭に出している姿。３年生と４年生が走るときに一生懸命応援する姿。１・２年生が演技の練習に嬉しそうに取り組む姿。そして、５・６ 年生が川島ソーランを真剣に創り上げている姿。私は、日本一の運動会になることを確信しました。皆様のご支援、心より感謝を申し上げます。

さて、運動会で思い出される出来事があります。私には男の子と女の子の双子がいます。お陰様で元気に育ち、小学校時代は二人とも６年間リレーの選手を務めました。小学校生活最後の運動会。私は勤務校の５年生の子浦体験学習の引率と重なり、直接観ることはできませんでしたが後日、妻から運動会の様子を聞きました。

それによると、次のようなことが起きたそうです。当日リレーで息子はアンカーになり、トップでバトンを受け取りました。その時２番手の子がインコースに入ってきたので接触し、その子はバトンを落としました。すると、息子はその子がバトンを拾うまで待ちました。その間に後ろから来た３番手の子に抜かれ、２位に終わったそうです。私は、「なぜ待ったの？」と息子に聞きました。すると息子は「そのまま行ってしまうのが、なんだか悪いと思ったんだ。でも、悔いはないよ。」そう言ってニッコリ笑いました。私は外に元気に遊びに行く背中に「とてもいいことをしたね！」と言いました。ルールからあるいは勝ち負けの面からみれば、息子の行動が正しいことなのか、疑問があるでしょう。それでも、**自分の信じる事を行い、清々しくて優しく生きる**姿に、心が揺れました。

「川島小学校のみんななら どう考えるかな。」と思い、朝会で「君ならどうする？」という題名で話しました。**「子どもを信じる事。」それは**「わが子に限らず**幸せな時間をプレゼントしてくれている、全ての子どもたちに対する恩返し**なのかもしれないな。」と思いました。

その息子もこの春、社会人になりました。都心に通うため、家を出ました。誰もいない部屋ができました。しかし、ぽっかりとあいた空間と心を川島の子どもたちの笑顔が埋めてくれています。私は幸せです。この**川島の子どもたちの笑顔のためにベストを尽くします。**

皆様。**子どもたちの笑顔のために**これからも**信頼とご支援、宜しくお願い申し上げます。**